



夕刊
 中日新聞東海本社
 浜松市東区薬新町45番地
 〒435-8555 電話 053(421)7711

2012年(平成24年)7月17日(火曜日)

若い力、苦境塗り替えて、

2人の左官 浜松で修業中

伝統の壁塗りを会得しようと、浜松市南区の左官業「武左工業」で、二人の若者が修業に励んでいる。桑原徹さん(三三)と榊林克行さん(三〇)は、ともに大学進学よりも、職人への道を選んだ。後継者難に頭を痛める親方らは、黙々と修業する二人の姿に、業界の再生を期待している。
 (木村春毅)



花器を塗って壁塗りの練習をする榊林さん(左)と、見守る桑原さん(中)と水野社長＝浜松市南区新貝町で

桑原さんは、静岡県内でも屈指の進学校、浜松北高校出身。高校卒業後にヨーロッパを中心に放浪し、何度も修繕して残ってきた町並みの美しさに心ひかれた。「昔が残る土着の文化にあこがれた」。浜松に戻ってから、古い家や物が次々と壊されて新しくなるさまを見て「なんとかしないと」と思い立った。

福岡県に渡って、農業も機械も使わない農業を学んだ後、新潟県に引っ越した。くぎやボルトを使わずに家を建てる「木組み」を続ける大工のもとで、六

後継者難の業界 再生の期待一身に

一年半働いた。今年三月に地元に戻り、武左工業の門をたたいた。材料運びのような下働きばかりでも、親方たちの仕事をみて覚え、雨で仕事できない日も勉強しているという。

一貫して伝統技術を学んでいる桑原さんが「昔がたいたいというわけではなく、未来につなげるヒントとして、昔を追究したい」と話す。将来は町並み保存や古民家再生などを通じて地域活性化が目標。まずは、五年は必要と言われる左官修業に集中する。

榊林さんは、山梨県

の葦崎高校を昨年卒業した後、すぐに浜松に来了。職人にあこがれて、住み込みで働くことに。「遊ばないようになしたかったから」縁もゆかりもない浜松を選んだ。

材料練りや材料運びが多いが、練習のために、押し入れの中などの下塗りを任されることもある。「こてを持っていてると夢中になる」といい、仕事のな

い日は、灯籠や花器を塗って練習している。いずれは山梨に戻りたいと夢見る榊林さん。「家族みたいに面倒を見てくれる親方のやり方を広めたい」と話す。

県左官業組合によると、県内の左官の会員数は約三百人と、最盛期だった昭和末期、平成初期の三分の一に落ち込んでいる。同社の水野武昭社長(六三)も「仕事が減って継承者が減る悪循環。気の毒で若者に左官を勧められない」とこぼす。そんな中で頑張る二人には「しっかりがんばってほしい」とエールを送っている。